

平成27年度岡崎市教育研究レポート

1

12	道徳
----	----

岡崎市立奥殿小学校 後藤 三奈

2 研究テーマ

豊かな心を持ち、共によりよく生きようとする力を育む道徳教育
～郷土の先人に学び、岡崎の心の醸成を図る～

3 研究概要

(1) はじめに

本学級の児童は、4月からほとんど欠席もなく元気に登校し、楽しく学校生活を送っている。係の仕事を進んで行ったり、清掃活動を一生懸命にしたりするなど、やる気に満ちた行動が多くみられる。しかし、その一方で、授業で出題された問題が分からないと集中力を欠き、よそ事をしてしまうなど、すぐにあきらめてしまう児童も少なくない。

児童にとってそれぞれ能力に差はあり、好きなこと、嫌いなこと、得意なこと、苦手なことはあるが、あきらめずに努力をすることは、これから生きる上でとても大切なことである。本学級の児童に、苦手なことや嫌いなことでも続けることの大切さに気付かせ、あきらめずに努力しようと思う気持ちを高めたいと思い、本テーマを設定した。

また、本学級の児童は、友達のできていないことや悪いところをよく見ており、粗探しをしている場面も見られる。その折は、お互いに指摘し合い、口論となることも多い。しかし、そのような子たちでも、人の手伝いをしたり、気の利いた行動をとったりできる。友達の悪い行動に注目するのではなく、よいところをもっと感じてほしい。そこで、自分のためだけでなく、困っている人のために今も自助具を作り続ける岡崎市在住の加藤源重さんのことを知り、共感し、他者のために行動することが自分の喜びにもつながるという心情を育てたい。そして、源重さんが大事にしている言葉である「思いやり」と「ありがとう」の精神を高め、よりよい人間関係を築き上げたい。

本資料「おかざきのはつめい王」(1-(2)勤勉・努力 出典 おかざきの心の醸成プラン「夢をつむいだ人々」)は、加藤源重さんの自伝である。56才の時、機械に右手を挟み手首から先をなくした源重さんは、これまでの知識を生かして、右手の働きを助ける器具を考える。しかし、義手や義足を製作するところへ行き、器具の製作を頼んでも断られたため、自力で万能ホルダーを完成させたという内容である。右手の機能を失った状態で、何度も失敗をしてくじけそうになりながらも、ごはんをおいしく食べたいという思いや家族の支えを助けに努力した姿からは、自ら努力する大切さを学ぶことができる。また、源重さんは、現在でも、身体が不自由で困っている人からの要望に応え、各種の道具を作っている。以上の点から、本資料が、あきらめずに努力しようとする気持ちや他人を思いやる気持ちを高めるのに適した資料であると考えられる。

(2) 研究の視点

2年生にとってこの資料は、文章が長く内容把握が難しい。適切な手立てを講じて、主人公の右手の指を失った辛さや不自由さに共感させながら、自助具の製作がうまくいかなくてあきらめたい気持ちと何としてでも作りたい気持ちの葛藤、さらにそれを乗り越える強い気持ちについて考えさせたい。

また、昨年度、「本時の整理の段階で、製作や発明についての感想を書く児童がいて、指導項目とのズレが生じた」ということが挙げられていた。これらを踏まえ、研究の視点を次の3点とした。

① 資料提示の工夫

- ・児童が主人公の様子を把握しやすいように、導入段階で主人公にまつわる動画を見せる。
- ・児童が資料の内容に浸りやすいように、場面絵を使った紙芝居を用いて分断読みをし、その都度発問をする。

② 心情により迫るための工夫

- ・主人公の生活振りを実感し易いように、右手が使えない不自由さを導入段階で疑似体験させる。また、視覚的にも主人公の状況がよく分かるように、主人公の動きを教師が実演して見せる。
- ・主発問に対する考えを明確にしやすいように、児童に吹き出し入りのワークシートを配布して書く時間を確保する。
- ・主人公のあきらめない気持ちに焦点化させるために、発明を続けていることや「三河のエジソン」と呼ばれていることについて書かれた文を本時の終末まで読み聞かせないこととする。

③ 児童の心を揺さぶる体験的・具体的な活動を効果的に取り入れた指導過程の工夫

- ・特別活動と組み合わせて2時間完了とする。主人公の思いやりの心や偉大さを感じさせたりするために、第2時では困っている人のために自助具を作り続けている主人公の現在の様子を聞かせたり、実際に道具を体験させたりする。それらの活動を通して高まった気持ちを、加藤源重さんへ手紙を書くことで明確化させる。

(2) 授業の実際

第1時 道徳の時間 「げんじゅうさんの気持ちを考えよう」

① 導入

源重さんの顔写真を見て、どのような人なのか想像をさせた後、資料1の写真を見せた。右手の指がないことにすぐに気が付き、子供たちは驚いた様子で、「どうして指がないの?」とつぶやいていた。その後、指がなくなった理由がわかる動画を見せ、岡崎市に住んでいる方であること、工場の機械が突然動き出したので指がなくなってしまったことなどを紹介した。「かわいそう。」「少しこわい。」と反応し出した児童を捉え、右手が使えなくなってしまった源重さんの不自由さを疑似体験させたいと考え、利き手を握らせて筆箱を開けたり、鉛筆をつかませたりさせた。「できる、できる」と強気に言う児童もいれば、「むずかしい」と悶え、弱音を吐く児童もいた。



資料1 指をなくした主人公

② 展開

本時の課題を確認した後、場面絵を見せながら、別紙資料①の場面をゆっくりと読み聞かせした後、次の発問をした。
(資料2)



資料2 場面絵を用いた読み聞かせ

【発問①】手をうごかす道ぐをだれも作ってくれないとわかったときの気持ちを考えよう

- C1 : みんな作ってくれないから、悲しい。
- C2 : すごく悲しい。
- C3 : 困っている。
- C4 : もう一人では生きられない。
- C5 : 右手が使えないから人生がもう終わりかな。

資料3 授業記録

発問①に対して、「悲しい」や、「困っている」、「人生が終わりだ」（資料3）など悲観的な言葉が次々と述べられた様子から、源重さんの辛い気持ちに共感できているのがわかる。

発言内容から主人公の悲観的な思いを学級のみんなで確認した後、青あざだらけになった左手を見つめる場面絵を見せながら話の続き（別紙資料②）を読み聞かせた。上手にくぎを打つことができない様子を見ながら、教師が右腕にハンマーを結び付けて動かして実演した。（資料4）子供たちはその姿を見て、「あぶないよ！」と顔をゆがめていた。（資料5）



資料4 教師の実演化



資料5 顔をゆがめて資料に浸る子

【発問②】青あざだらけの左手を見たときの気持ちを考えよう

発問②をした後、傷だらけになった手を見たときの源重さんの気持ちをワークシートに書かせた。ワークシートには、資料6の児童Aのように、自分の力で作ることをあきらめて他者に頼りたいと考える子や、資料7のC6～C14の発言のように後ろ向きな気持ちを発言する子が多かった。『左手が（まけるな。まだ、だいじょうぶ。）といってくれているような気がして、はっとしました』という、源重さんが少し前向きな気持ちになる文まで読み聞かせてからの発問だったが、思い悩んでいる主人公の場面絵や教師の実演が影響したのか、消極的な発言が多かった。そんな発言が続いた矢先に、C15は前向きな気持ちを発言した。（資料7、8）

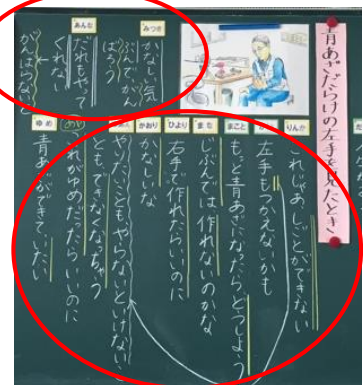


資料6 児童Aの吹き出しワークシートへの記述

その後、万能ホルダーを手にした源重さんの写真を見せながら、話の続き（別紙資料③）を読み聞かせ、発問③をし

- C6 : これじゃあ、もう仕事ができない。
- C7 : このままだと左手も使えなくなるかもしれないな。
- C8 : もっと青あざになって、ひどくなったらどうしよう。
- C9 : 自分ではもう作れないのかな。
- C10 : 右手で作れたらいいのにな。
- C11 : かなしいな。
- C12 : もうだめかな。これからはかなしい気分でがんばろうかな。
- C13 : 左手も使えないと、やりたいこともやらないといけないこともできなくなっちゃうよ。
- C14 : これが夢だったらいいのにな。
- C15 : 誰もやってくれないから、自分でがんばらないと。

資料7 授業記録



資料8 主人公の葛藤する思いを上下に分けて書いた構造的な板書

た。その授業記録が以下の資料9である。

【発問③】 万のうホルダーがかんせいしたときの気持ちを考えよう

C16：やったあ！やっつ、これで右手が使えるようになったぞ。
 C17：もうこれで左手が青あざにならないぞ。
 (つぶやきC18：でもこれだけで暮らすのは大変だよ)
 C19：大丈夫だよ。だって、家族がいるもの。
 C20：C16さんにつけたしで、これで好きなお刺身も食べられる。
 C21：これでちゃんと仕事ができる。
 C22：もう手のことで悲しまなくてもよくなるな。
 C23：仕事でこれからたくさん作ろう！
 (つぶやきC24：信じられなーい！なんでここまでできたの？どれくらいかかったの？)
 T：簡単にはできなかつたんだよね。どうしてできたんだろう？
 C25：何事もあきらめないうでやればなんでもできるってことだ。
 C26：あつそうか。最初は自信をなくしちゃっていたけど、できるって自信をもてたんだね。
 C27：あきらめずに最後までやったから、作れるようになった。
 C28：わかった！野球とかサッカーとかでも同じだね。

資料9 授業記録

C16～C23のように、やっつの思いでホルダーが完成した喜びや不自由がなくなる喜びの気持ちが高まっていった。そんな中、C24が「なんでできたの？どれくらいかかったの？」と主人公の努力に対する驚愕の気持ちをつぶやいた。そこで、教師がその意見を取り上げ、「簡単にはできなかつたんだよね。どうしてできたんだろう？」と補助発問をした。すると、C25からの発言のように、本時のねらいとする「勤勉・努力」の気持ちに焦点化していった。さらに、C28が「野球とかサッカーとかでも同じだね。」と述べた。この自分の生活を振り返る発言が展開後段の自覚の段階へとつながるきっかけになると判断した教師は、C28が言ったように、「みんなも今までの生活の中であきらめなかつたことはありませんか」と問いかけた。

③ 自覚

いままでの生活の中で、あきらめなかつたことを書きましよう

自分自身の経験を思い出し、今までにあきらめなかつた出来事をワークシートに書いた。(資料10) その内容は、勉強のことであつたり、けがにも負けずにがんばつたことであつたりで様々であつた。また、資料6のワークシートで、自分の力に限界を感じて他力本願な気持ちを記述していた児童Aが、資料10では「あきらめるといふことばをなくす」と力強い決心を書いていることから、児童Aに努力する気持ちが高まったのがわかる。また、どういふことを書けばよいか分かつていなかつた児童もいたが、友達の発言を聞くことで、「あつ、そういうことならわたしもあつたよ。」と言って、ワークシートに書く児童も見られた。

あきらめるといふことばをなくす
 たらサッカーで点
 かとれたり空手の登
 でかちそうになつたり
 プールでも泳ごう
 かんがえたり
 うつことばをなくす
 ほろが、あれたとオ、
 あきらめるといふことばをなくす
 がまんしてなあし
 てさらりしました。

資料10 自らの生活を振り返って

児童A

を記述していた児童Aが、資料10では「あきらめるといふことばをなくす」と力強い決心を書いていることから、児童Aに努力する気持ちが高まったのがわかる。また、どういふことを書けばよいか分かつていなかつた児童もいたが、友達の発言を聞くことで、「あつ、そういうことならわたしもあつたよ。」と言って、ワークシートに書く児童も見られた。

4 成果

① 資料提示の工夫についての成果

本資料は、話の内容が難しい上、主人公の指がないという衝撃的な状況であるため、2年生の児童がどこまで共感、理解できるかが想定できずに不安であった。しかし、資料を紙芝居のようにしながら読み聞かせて分断提示したことによって、各発問までの文章が短くなり、子供たちは集中を切らさずに聞くことができていた。分断読みの際に“物語の展開が予想通りか否か”ということに着目してしまう児童も見られなかった。また、写真だけでは伝わらない源重さんの手の状況を、導入時に動画で見せたことも効果は大きいと感じた。機械にはさまれてしまったという深刻な状況を教師の口からだけではなく映像と共に把握できたため、資料の内容に浸りやすかったと思われる。

② 心情により迫るための工夫

発問2では、教師によるハンマーを使つての実演を見たため、道具を作ることの大変さに共感した発言が多く見られた。また、源重さんの気持ちを考え易くするための吹き出し付きのワークシートは、どの児童も戸惑うことなく書き進められた様子から、効果的であったと言える。

源重さんの「あきらめない心」に焦点化させるために、困っている人のために発明を続けていることや「三河のエジソン」と呼ばれていることなどを本時で読み上げなかった結果、自覚段階でのワークシートに発明に関する筆記内容が一切なく、源重さんのあきらめない心の強さに着目することができたと思われる。

③ 児童の心を揺さぶる体験的・具体的な活動を効果的に取り入れた指導過程の工夫

“人のために”という思いやりの話を第2時で伝えたことで、より一層源重さんへの憧れ、尊敬の念が児童たちの中で増したことがつぶやきからわかった。授業後、教室に源重さんの写真や道徳の授業に関連する物を掲示したところ、学期末の懇談会の際に、その掲示物を見た何名かの保護者が「この方が加藤源重さんなんですね。」と言われることがあった。続けて話を聞いてみると、道徳の授業があった日に、家で源重さんのことを思う存分に児童が語ったということであった。学校でも、何かある度に、「あきらめちゃいけなかった。」とか「〇〇してくれてありがとう」と伝え合える児童が増えてきたことから、加藤源重さんの半生に関わる学習を通してきたことで、岡崎の心が醸成されてきたと思われる。

5 今後の課題

本時の導入で、児童に利き手の指を使わないことで不自由さを体感させる活動を取り入れた。その際に、教師が「できる？」と学級全体に問い掛けをしたが、できそうもないよねという意味で受け取った児童が、むきになって「できるよ」と反応していた。「どうだった？」というような問い掛けをするなど、声の掛け方にも注意が必要だと感じた。また、発問②では、前向きな気持ちを表した発言がなかなか出なかったが、C12の発言「悲しい気分でがんばろう」に対して「悲しみながらがんばるとはどういうことなのか」と問い返しをするなど、主人公の葛藤している様子にもっと踏み込めるとよかったと思った。児童への声掛けの仕方、意見に対しての問い返しや切り返しなどをさらに吟味し、実践を繰り返す中で自身の力量向上につなげていきたい。